

天
女
降
臨

天女が舞い降りるかもしれない 好天

朱の屋根が 朱に輝っている 秋日和

ラカン槇の芽が やさしい日向にある

秋風音なく 木々の葉に煌めき流れ

パソコンに体よく使われ 一日終わる

電子情報の危うさ このこれがベストか

電話でも手紙でもない メールという危うさ

油断のならぬ世になる 機器に囲まれ

断固パソコンは使わぬと 吾も主張してきた

赤い機のぼりゆく 青一色の空に

早朝人影少なし 胃カメラに行く

秋の気締めまり 川べりを無言で歩く

改札口 いつものラッキーナンバーを選ぶ

検診からなんとか解放さる 自動ドアの音よろし

トネリコの緑軽く 秋日に跳ねる

淡い空のもと 法師蝉歌い始める

法師蝉 歌うことが今生の証かもしれぬ

陽水の心もよう 手紙書きたし吾に

ハーモニカ習いたしと 切なく思う日

音符など知らず 口笛自由に吹きしか

出版の表紙を 明るい色調に変える

溪流を日が透いている 苔青きほど

青味泥の茂みに 若鮎群れている

月を研ぎ澄まし 遠ざかりゆく雲

秋の月が渡りゆく 薄雲の島幾つ

葉蘭さらさら翻る 緑の風つくり

心地よいメロディ流る 曲の名知らず

大根芽吹く 朝露を分け

三校を終え 出版のこと定まる

窓開け 光る秋風と戯れる朝

体の冷え心の冷えが 万病の元と

足湯二十分 サウナのごとく火照りくる

ヨガの型借り 忘れかけた呼吸を探す

足の裏もみほぐす 首肩腰の重さに

べたりとした雲 峰のあたりに湧く夕

漏斗雲というらし 竜巻の子は

長雨続く と予報士予言者のごとくいい

庭の隅に大根蒔く 雨の中

大根の畝叩き付け 慈雨となる

蟋蟀飛んだ 草叢の残像白し

ふと大合唱になっている 虫の声

大銀河流れ 虫鳴いている山の里

銀河まで届けよと 虫競い鳴く

嬉しい思い出探す 夏の終わりに

木々の芽涼し 驟雨のあと

自転車買い 戻ってきた風の中

万華鏡 散る花片と咲く花片と一閃

星が瞬く 魂持つ者のごとくに

カシオペア座 に戻りたしとなぜか思う

双眼鏡　アンドロメダ座星雲そこに

表札に蝉がとまっている　夕暮

むきになっていい募る　秋風の中

百科事典を繰る白い指　図書の午後

井戸の底に　秋風棲むという古老

去りゆく夏　飛行機雲しどけなく流れ

花火始まるらし　屋根の向こうに

花火空に躍り　大輪の花咲き流れ

空に残り　花火カラリと消えていく涼し

よい陽が射してきた　蒼い空から

秋の蝶　フタフタ泳ぐ雨の中

通り抜けた　たちまち風となり

朝顔高く低く咲いている　廃坑の町

月を焼く　炎が青い

指の間の石に 指紋を探す

無人の駅に コンドルの歌流れている

あとずさりして歩いてみる 雨の中

狂女尿する 秋空に放歌する

生まれ出る子と死ぬ母が 交差する朝

コスモス揺れている 大空の真下

カラコロと 秋が坂道歩いてきた

息をすれば落ちてしまふ 切岸に立つ

山を下りてくる 山を背負って

柿の葉落ちた空が ストンと明るくなった

箸でつまんだ火を 闇に移す

東京 いつも見えない風が吹いている

谷に吸われる雨 音がない

クルリと背中を見せ 電車が閉まった

むかし論破した ことばが淋しい

してもらいたいよう他にしなさい 扁額をみる

ライフワークと定め キリシタン伝読む

停電復旧する 宙に火花散らし

東雲の雷 音なく山肌に降る

飛行機 音だけとなり靄の中のぼりゆく

ゲリラ雨襲来 排水溝轟き流る

時雨の中 街がだらだらと歩く

四十二歳の訃 秋蝉鳴きやまず

裸電球切れた トイレ闇に沈む

退職の日 ふと大切なこと蘇る

マウスをはこび 四十年の幕をひき下ろす

いつも門口で待つ猫に手を振る 野良なれど

火の音が わが身を吹きさらす

南無阿弥陀仏 一足ごとに赤とんぼ連れ

石になりきって 座禅している

レイテ戦伝える 勝者も敗者もなし哀し

苦い思いを 指の間からこぼす

草を払い 石室炎天に開かる

砂吹き寄せくる 風切り裂く音となり

赤とんぼと目が合う 朝の出がけに

なんとなく嬉しい思いで 川べりを歩く

猫しのび寄る気配に 目覚める

九十八歳の一期十五歳の一期 炎天影なし

死に急ぐ若者あり 全山に蝉時雨降る

渡り終えた橋が 揺れ止まない

炎昼の国道 猫ひたひたと渡る

空の極みに 機影マジックのように消える

海深くに沈んでいた 夢であつたか

全身にコリありと 鍼師つぶやくようにいう

深呼吸 してみる ことなど忘れていた

びしびしと雷光が打つ 飛沫のように

カーペンターズ 夏風邪の枕辺に寄り添う

再起動というしくみ 本物かもしれない

雌蟬がひしと抱えている洞 空は見えるか

西海の落日 緋の絶唱

糸を巻くミイラ ガラスの中に秋の風吹く

石を投げる手が 投げられる

線路続いている果ての 炎ゆる

粘土を貼り付けたような島に生まれて 日暮るる

雑踏しんと静まりかえる朝を 歩いている

ほろほると 豆蒔くもよし

虹をわたるか 赤とんぼ

腕時計を買い 時を預かっている

背中のコリを揉みほぐして 寝る

畑掘り種蒔く 猫がいて

猫とももの言う 白い帽子のまま

あるがままにと 互いの目を見る

男の一念 毫も振り返らず

駅の階段のぼり降りしのみ 男一人

決意するほかない ブランコぐつと突き出る

それでよいのだと 領き書を閉ず

全てを委ね 導きのままに流れよ

ど根性の気が湧き出ずる 土壇場には

障子の穴から 日本海が覗いた

荷物を捨てに来た 筈の海峡